南比企窯跡群と武蔵国分寺跡

－瓦がつなぐ平成の国分寺造営－

手島　芙実子　（鳩山町教育委員会）

１．はじめに

鳩山町の概要

埼玉県比企郡鳩山町は埼玉県の中央部に位置する総面積25.73㎢の小さな町である。北はときがわ町と嵐山町、西は越生町、東は東松山市、南は越辺川を境に坂戸市と毛呂山町と接している（図１）。

町域は、東西に長い形をしており、標高80～100mの丘陵と越辺川に面した低地から成り立っている。丘陵内部は越辺川およびその支流の小河川が枝状に入り込み侵食谷（谷津）を形成している。東日本最大級の窯跡群である南比企窯跡群は、この丘陵部に所在する。

鳩山町の人口は、平成７年（1995）の17,973人[1)]に対して、令和２年10月１日現在では13,506人と大きく減少し、少子高齢化が深刻な課題となっている。

令和元年度の歳出総額は54億2,563万円、そのうち文化財保護経費は約4,006万円となっている。

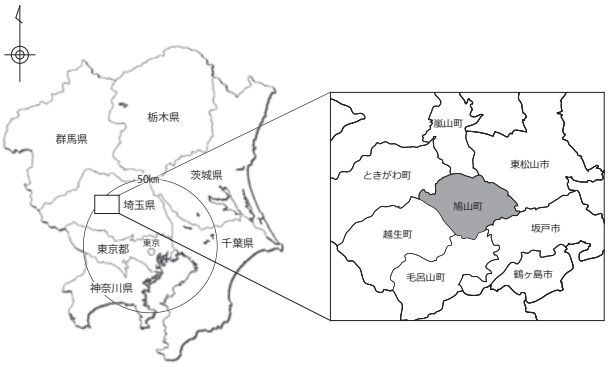


図1　鳩山町の位置

２．南比企窯跡群と武蔵国分寺跡

（１）南比企窯跡群の概要

南比企窯跡群は、６世紀初頭から10世紀前半頃にかけて須恵器や瓦を生産した東日本最大級の窯跡群である。鳩山町を中心に、嵐山町・ときがわ町・東松山市の一部にかけて分布し、都幾川と越辺川の間に広がる岩殿丘陵上に立地する。

これまでの調査で、200基以上の窯跡が確認され、工房を含む集落や粘土採掘坑などの関連遺跡を含めると東西約4.5km、南北約５kmに及ぶことが判明している（図２）。

南比企窯跡群は、これまでの分布調査や発掘調査の成果から、河川流路を中心とした地形により７つのグループに分けられ、さらにそのなかで57の支群に細分することが可能である。

南比企窯跡群は、奈良時代から平安時代初頭にか

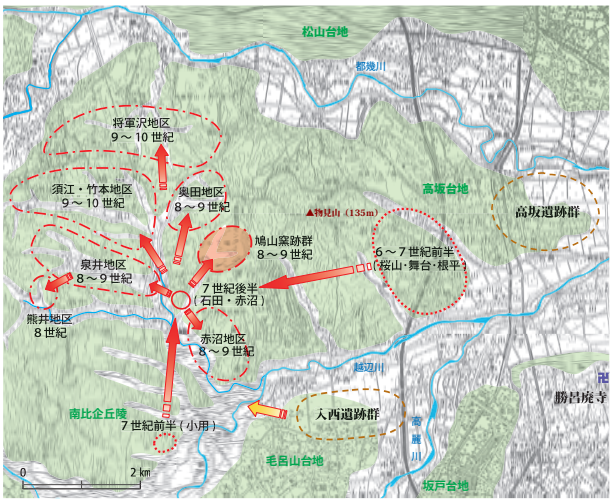


図２　南比企窯跡群展開模式図

けて、武蔵国内の地方官衙や集落に須恵器を供給し、地方寺院や武蔵国分寺に瓦を供給した窯跡群である。また、国分寺の瓦生産体制や関東地方の須恵器生産と流通を考える上で欠くことのできない遺跡である。

鳩山町では、南比企窯跡群の保存・活用を図るため平成21年度より国指定史跡化に取り組んでいる。

（２）武蔵国分寺跡の概要

史跡武蔵国分寺跡は、天平13年（741）の国分寺建立の詔により諸国に設置された国分寺のひとつである。東京都国分寺市の東南部、多摩川支流の野川源流域に広がる標高約65ｍの武蔵野台地上に立地し、古代の官道である東山道武蔵路を挟んで、東側に僧寺、西側に尼寺がある。武蔵国は21の郡からなる大国で、国分寺の造営にあたっては武蔵国内の人々の力が総結集されたが、完成までには20年ほどの期間を要したと推定される[2)]。

これまでの発掘調査で、金堂、講堂、鐘楼、中門など伽藍中枢部のほか、南門、七重塔が確認されている。さらに、寺院を支えた周辺の集落域の範囲を含めると東西約２㎞、南北約1.5㎞に及ぶことが判明している（図３）。

全国に建てられた国分寺のなかでも規模が大きく、歴史的にも重要なことから、大正11年（1922）に国の史跡に指定された。平成22年（2010）には、東山道武蔵路が追加指定され、「武蔵国分寺跡　附東山道武蔵路跡に名称変更された。現在の史跡指定範囲は155,261.2㎡で、公有化率は約78％である[3)]。

図３　武蔵国分寺整備前の伽藍中枢地域
（武蔵国分寺跡資料館提供）

（３）南比企窯跡群と武蔵国分寺跡のつながり

現在の行政区分では、埼玉県と東京都に分かれる南比企窯跡群と武蔵国分寺跡は、古代においては同じ武蔵国に属していた。

国分寺造営が急がれるなか、南比企窯跡群では、８世紀中頃から後半にかけて、武蔵国分寺創建期の瓦の約８割を生産し、南多摩窯跡群にかわり、国分寺の瓦生産の中心地となった。９世紀中頃以降も規模を縮小するものの、国分寺再建期の瓦を生産した。

生産拡大の背景には丘陵や粘土などの地形・資源に恵まれたこともあるが、国分寺造営以前に比企・入間・足立など複数の郡の地方寺院・官衙に須恵器や瓦を供給していた実績も関係したと考えられる。

３．「平成の国分寺造営」の再現

（１）実現に至る経緯

平成21年（2009）２月に「史跡武蔵国分寺跡（僧寺地区）整備実施計画」が策定され、伽藍中枢部の整備が始まろうとするなか、南比企窯跡群でも大きな動きがあった。同年３月に文化庁調査官による石田遺跡の現地視察を受け、新沼窯跡などと併せて国史跡とすることが望ましいとの評価を受けたのである。

その後、鳩山町では新沼窯跡などの調査を実施するとともに、平成24年度には町制施行30周年記念事

図４　町制30周年記念ミニ瓦作り

業として、復元古代窯の築窯とミニ瓦作りを実施した（図４）。

このような状況のなかで、旧武蔵国内の自治体間が連携・協力して双方の文化財保護施策を進め、公開・活用に向けた様々な普及事業を実施したいと、担当者間レベルでの合意に至った。

そして、ミニ瓦作りの実績などもあることから、古代における瓦の生産地と消費地という往時のつながりを活かし、「平成の国分寺造営」として、武蔵国分寺跡伽藍中枢部の整備に用いる瓦の制作など連携事業を進めることとした。

なお、事業の実施にあたって、平成25年（2013）８月に「平成の国分寺造営―古代瓦の制作・運上、及び史跡整備の連携事業―」に関する協定を締結した。

（２）事業の概要

平成25・26年度は、鳩山町産の粘土を用いて、「古代瓦作り体験教室」を開催し、多くの国分寺市民と鳩山町民が参加した。制作にあたっては、武蔵国分寺跡再建講堂の瓦積基壇外装の主体となる平瓦を制作することとし、国分寺で出土する平瓦の主たる製作技法である凸型成形台による粘土板一枚作りで制作した（図５）。

これらの瓦は、約３ヵ月乾燥期間を経て、古代の窯をもとに復元した窯で焼成を行った。

その後、平成25年11月２日の「はとやま祭」では、古代の瓦工人に見立てた衣裳を身にまとった10人の町民（瓦長１名、瓦工７名ほか）が、武蔵国分寺へ向けて瓦を背負い運上する出発式が行われた（図６）。その２日後の11月４日には、「国分寺まつり」で運上瓦の受け渡し式が行われ、造瓦所瓦長から造武蔵国分寺司に運上目録と町市民が制作した復元瓦が献上された（図７）。

２ヵ年度にわたり制作した瓦は、復元講堂基壇西面の外装に活用することとし、翌年12月13日に「町外文化財めぐり」にあわせて、町市民自らが瓦積基壇に瓦を埋め込む復元作業を体験した（図８）。

これらの事業を通じて、町市民レベルでの交流だ

図５　平成25年度古代瓦作り体験教室

図６　鳩山町を出発する古代の瓦工人
（武蔵国分寺跡資料館提供）

図７　国分寺瓦受け渡し式（武蔵国分寺跡資料館提供）

図８　復元瓦を基壇に埋め込む作業の様子
（武蔵国分寺跡資料館提供）

けでなく、国分寺市における文化財のPR方法、ボランティア活動や育成制度を学ぶことができ、大いに参考となった。

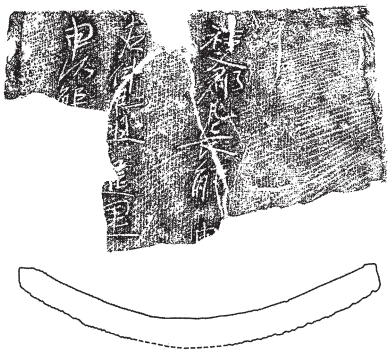
４．再現方法と史実の伝え方

（１）古代瓦作り体験

古代瓦作り体験の再現方法については、先述のとおりである。成形台や叩き具・弓については、新沼窯跡や鳩山窯跡群から出土した瓦の製作技法や叩きなどの調整をもとに復元し、叩き具の形状については大阪府日置荘遺跡出土の須恵器の叩き具をもとに復元した。ヘラについては、出土した瓦の調整を参考にしたが、本来、刀子を用いるべきところ、安全性を考慮して木製のヘラを代用した。

また、体験の事前学習では、出土資料をもとに瓦の歴史や作り方を説明し、本来の作り方や道具の材質と違う部分についても伝えるようにした。

なお、瓦の製作技法については、大川清氏や山本清一氏による復元考証を参考にした[4)]。



□秩父郡瓦長解　申
右件瓦且進運
申以解□

図９　武蔵国分寺跡出土解文瓦
（島根県教育庁古代文化センター提供に加筆修正）

図10　瓦長から造国分寺司への瓦の献上

（２）国分寺瓦運上出発式・受け渡し式

武蔵国分寺の造営においては、文献資料が残されていないため、運上瓦の出発式や受け渡し式が行われていたという根拠はない。特に、出発式については運上にあたり瓦の検品は行われたであろうが、儀式などは行われなかったと考えられる。

ただし、運上瓦の受け渡しについては、参考となる文字瓦が採集されており、次に掲げる史料を参考に再現を試みた（図９）。

下半が欠損しているため、全容は不明であるが、秩父郡の瓦長が瓦を貢進する旨を上申する文書と考えられる。しかし、瓦に記銘した場合、数量管理・把握に用いるには不便と考えられるため、これは貢進文を作成するための下書きとしての案文や解文作成の習書などとも考えられている[5)]。

また、国分寺の造営にあたっては、造東大寺司と同じような官司が置かれていたと推定し、寺崎保広氏による瓦進上状木簡の検討[6)]なども参考に、瓦

長（鳩山町民）から造国分寺司（国分寺市民）へ瓦の受け渡しを行った（図10）。

（3）運上瓦の受け渡し式再現にあたって

再現にあたっては、国分寺市教育委員会・鳩山町教育委員会の担当者を中心にシナリオ・衣装・小道具などの考証を行った。

「儀式」が行われていた根拠はないが、先述のような文字瓦や瓦進上状木簡の存在などから、生産現場から造営現場へ生産した瓦の枚数等を報告していたことは間違いない。この史実に基づき、瓦工房の責任者である瓦長から造営現場の責任者である造国分寺司への受け渡しをすることが決定した。

現代的アレンジ部分としては、双方の交流を深めるため、それぞれの祭り会場のステージで儀式として再現し、出発式では行列にゆるキャラを加えたことである。また、本来であれば30kg～60kgの瓦を背負うところを、参加者の体力を考慮し、発泡スチロール製の模造瓦を使用した。

当時は、文化財の活用に関して、観光部局やまちづくり部局からの要望はほとんどなかったため、教育委員会担当者間で決定されたシナリオどおりに実現された。

5．運営体制

古代瓦作り体験は、瓦作りの道具製作と焼成に伴う講師謝金、作業委託料約90万円を鳩山町教育委員会が負担した。また、復元瓦の加工と体験の資料として作成した「古代の瓦づくり」リーフレット印刷製本費約10万円を国分寺市教育委員会が負担した。

国分寺瓦運上出発式と受け渡し式は、それぞれの祭りのステージ上で行われたものであるため、直接の運営主体ははとやま祭実行委員会および国分寺まつり実行委員会となる。

このため、ステージの出演時間や内容については、はとやま祭を所管する産業環境課、国分寺まつり実行委員会歴史部会と国分寺まつりを所管する文化のまちづくり課と協議を行った。

役割分担については、それぞれの祭り会場に出展するPRブースはテント・テーブルなどの設営は会場自治体が行い、パネルや展示物の掲示作業は双方の自治体が行った。

また、参加者の衣装と背負子については、業者からのリース品を使用し、鳩山町民10名分の費用については、鳩山町が負担した。

なお、ステージの音響等は双方ともイベント会社へ業務委託しているが、費用については祭りの運営主体者が負担した。

6．成果と課題、今後の展望

（1）成果

成果としては、「古代の瓦作り」を体験することで、瓦工人の技術力や苦労を実感し、古代をより身近に感じることで南比企窯跡群の価値を知ってもらえたことである。また、瓦作りの道具を制作し、瓦作りの方法をマニュアル化することで、一度限りのイベントではなく、瓦作り体験の継続が可能となっている。

さらに、「平成の国分寺造営」として、運上瓦の出発式・受け渡し式を再現することで、鳩山町と国分寺市の歴史的な関係性のＰＲ、町市民レベルでの地域間交流を図ることができたのは、今後につながる大きな成果である。

（2）課題

課題としては、大きく２つあげられる。

１つ目は、瓦作り体験に協力していただいたボランティア団体が解散したことである。結成当初は古代の瓦作りを再現するという目標の下、町担当者とボランティアが連携して取り組んでいた。

しかし、「平成の国分寺造営」が一段落し、今後の焼き物づくり体験で何を作るかという課題に直面し、瓦や須恵器など古代の鳩山で生産されていたものを作りたい町担当者と、参加者の増加を図るため植木鉢など実用的なものを作りたいボランティアの間で意見の食い違いが生じた。結果的には、平成28年度にこのボランティア団体は解散し、現在は別のボランティア団体や臨時職員の協力により焼き物づ

くり体験を実施している。

このような事態を招いた要因として、「協働」の視点の欠如とコミュニケーション不足がある。これには、文化財担当者１名が文化財保護行政を担当するという組織運営上の問題も大きかったが、道具や粘土の準備、瓦作りの講師などボランティアへの負担が大きすぎたと考えている。

今後は、目標や課題を共有し、互いの能力や資源を補完しながら取り組んでいきたい。

２つ目は、運上瓦の出発式・受け渡し式を再現する際の考証が不足したことである。その結果、史実とそうでない部分（出土資料等による補完・推測）が十分に伝えられず、儀式が実際に行われていたとの誤解を与えてしまったおそれがある。

このような事態を招いた要因として、準備期間の不足が考えられる。史実の考証やそれをどのように伝えるかというシナリオの作成にはそれなりの時間が必要であるが、十分確保できなかった。

今後、このような儀式を再現する際には、史実の伝え方も含めて、再現方法やシナリオ作成の検討を行いたい。

（３）今後の展望

鳩山町と国分寺市の交流事業は現在も続いており、平成30年（2018）３月には、文化・経済・教育・スポーツ・観光などの分野で相互に支援・協力する友好都市協定を締結した。

平成30年度の武蔵国分寺跡史跡整備工事では、金堂と講堂間を結ぶ礫敷・瓦敷通路遺構の復元が行われ、そこでも鳩山町民が制作した復元瓦が活用されている。

現在、隔年で文化財めぐりやミニ瓦作り体験、合同企画展などを行っているが、今後は文化財以外の分野でも相互交流を深めていきたいと考えている。

このような取り組みは、全国の国分寺と国分寺瓦窯の所在する市町村で実現することが可能であり、瓦生産体制は各地域で様相が異なることから、特色ある事業ができるのではないだろうか。

また、瓦の運搬ルートが判明しているところでは、沿道の市町村も含めて連携することで、より広域な地域間交流が可能となるだろう。

その際は、ぜひ多くの地域住民に関わってもらい、再現イベントや体験事業を実施することをお勧めしたい。そうすることで地域の文化財への理解が深まるだけでなく、文化財が持つ価値の再発見や地域の活性化にもつながっていくはずである。

今回の報告にあたり、国分寺市教育委員会より協力をいただきました。記して感謝します。

【補註および参考文献】

１）国勢調査による数値
２）文化庁編　2018『発掘された日本列島2018新発見考古速報』共同通信社、国分寺市教育委員会ふるさと文化財課　2019「国指定史跡武蔵国分寺跡 附東山道武蔵路跡僧寺伽藍中枢地域の整備～歴史公園ガイドブック」
３）国分寺市教育委員会よりご教示を得た。
４）大川清　1996『古代のかわら』窯業史博物館、山本清一　2006『めざすは飛鳥の千年瓦』草思社
５）井上翔　2017「地方官衙の司・所と国分寺―「郡瓦長」解文瓦の再検討を通じて」『古代東国の地方官衙と寺院』山川出版社
６）寺崎保広　2000「瓦進上木簡少考」『日本古代木簡雑考（私家版）』初出1985